

ウイグル語における形容詞由来動詞

藤家洋昭 (大阪大学) Reyihan Pataer (甲南女子大学)

1. はじめに

ウイグル語 (Uyghur Tili) は、言語のタイプとしてはこう着語に分類され、接辞が発達している。ウイグル語においてある品詞から別のある品詞への派生は珍しくなく、形容詞から動詞への派生も見られ、基本的なことは記述されている[1][2]が、形容詞から動詞への派生が意味や項の点でどのようなメカニズムになっているかは不明な点が多い。そこで、本研究ではウイグル語における形容詞から動詞への派生について、自動詞化と他動詞化、そして、派生された動詞のアスペクトを中心に明らかにする。

2. 形容詞由来動詞

動詞とひとことと言っても実にさまざまなものがあることは、ここであらためて述べるまでもないことである。たとえば自動詞と他動詞の区別をはじめとして、意味の点では活動動詞、変化動詞の区別があげられる。形容詞が動詞に派生される場合、自由にいろいろな動詞が派生されるのだろうか、それとも何らかの制限があるのだろうか。あるとしたらどのような制限だろうか。

ウイグル語においては、*Bu kitap yaxshi*。「この本はいい。」(*yaxshi* は形容詞) のように、形容詞も単独で文の述語になることができるが、品詞として、動詞と形容詞がはっきりと区別される。どのように区別されるか、ここで確認しておく。

まず、直接つくことのできる接辞の種類が違うことがあげられる。動詞には、例えば連

用修飾を表す、*-(i)p*、連体修飾を表す、*-gen* などがつくことができるが、これらは、形容詞に直接つくことができない。*égiz* 「高い」、**égizip*, **égizgen*。次に、他の語との共起のしかたに違いがみられる。形容詞はそのままの形で名詞の前に立ってその名詞を修飾することができる。例：*yaxshi kitap* 「いい本」。これに対して、動詞はそのままの形 (いわゆる語幹) では名詞の前に立ってその名詞を修飾することができない。**kel mehman* (cf. *kelgen mehman* 「来たお客」)。

このように、ウイグル語では形容詞と動詞は別の品詞であるが、形容詞から派生したと考えられる動詞が存在する。派生には、転換 (*conversion*) などの方法があるが、ウイグル語では形容詞を動詞化するためには接辞がつく。形容詞を動詞化する接辞はいずれも接尾辞で、主なものは、*-le*, *-let*, *-lesh*, *-leshtür*, *-ey*, *-eyt* である。これらには母音調和による異形態 (*-le~-la*, *-let~-lat*, *-lesh~-lash*, *-leshtür~-lashtur*, *-ey~-ay*, *-eyt~-ayt*) があるが、本稿では、*-le*, *-let*, *-lesh*, *-leshtür*, *-ey*, *-eyt* をそれぞれの代表として扱い、以降異形態についてはふれない。

ここで2種類の *-lesh* についてふれておく。ウイグル語には、ウイグル語伝統文法[1][2]で *ömlük derije* 「共同態 (日本語の用語は先行研究[10]による)」と呼ばれている、動詞の態の一つがある。これは、動詞語幹に *-(i)sh* をつけることによって作られる。母音終わりの語幹につくときは *-sh* という形になるため、*-le* についたときは *-lesh* となり、形容詞から動詞を派生する形式の一つである *-lesh* と全く同

じ形になる。実際、形容詞から派生した-leで終わる動詞に共同を表す-shがつくことによってできた動詞があるが、それらは本研究の対象から除いた。

3. 基本データと考察

3.1 基本データ

ここでは、ウイグル語における形容詞由来動詞に関連する基本データをみる。2章で見たとおり、ウイグル語の形容詞由来の動詞は、形容詞に-le, -let, -lesh等の接辞がつくことによって形成される。ここでは、接辞の種類ごとにグループ分けしてデータをあげる。以下のデータは先行研究[5]の形容詞リストをもとに市販の辞書[3]から得た。

-le

kichikle-「小さくなる」、égizle-「高くなる、上昇する」、pesle-「低くなる」、chongqurla-「深くなる」、qelinla-「厚くなる」、yiraqla-「遠くなる」、azla-「少なくなる 減る」、tikle-「垂直にする 縦にする」、yénikle-「軽くなる」、yengila-「新しくする」、arzanla-「安くなる」、tohrila-「正しくする 正す」等

-let

kichiklet-「小さくする」、égizlet-「高くする」、chongqurlat-「深くする」、qelinlat-「厚くする」、azlat-「少なくする 減らす」、yéniklet-「軽くする」、erzanlat-「安くする」等

-lesh

kichiklelesh-「小さくなる」、peslelesh-、chongqurlash-「深くなる」、téyizlash-「浅くなる」、inchikilelesh-「細くなる」、yiraqlash-「遠くなる」等

-leshtür

chongqurlashtur-「深くする」、yiraqlashtur-「遠くする」、yeqinlashtur-「近くする」、éghirlashtur-

「重くする」、qarangghulashtur-「暗くする」等

-ey

chongay-「大きくなる」、zoray-「大きくなる」、pesey-「下がる」、taray-「狭くなる」、köpey-「増える」、azay-「少なくなる 減る」、qaray-「黒くなる 暗くする」、

-eyt

chongayt-「大きくする」、zorayt-「大きくする」、peseyt-「下がる」、tarayt-「狭くする」、köpeyt-「増やす」、azayt-「少なくする 減らす」、qarayt-「黒くする 暗くする」等

3.2 考察

形容詞由来の動詞が自動詞であるか他動詞であるかをみてみると、-le型のものは基本的に自動詞であることがわかる。例:égiz「高い」、égizle-「上昇する」。ただし、少数ではあるが、他動詞のものも存在する。例えば、yéngi「新しい」に-leがついたyéngila-は「新しくする」という意味の他動詞である。対応する自動詞は、yéngilan-「新しくなる」である。-let型のものはすべて他動詞である。-ey型、-lesh型のものはすべて自動詞である。そして-eyt型、-leshtur型のものはすべて他動詞である。

ここまでのところをまとめると、ウイグル語の形容詞由来動詞は、形容詞に-leなどの接辞をつけることによって形成され、多くの場合自動詞が基本で自動詞にさらに接辞がつくことによって他動詞が形成される。

4. 分析

前章で見たデータを分析する。分析の枠組みには語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure 以下 LCS と記す) と主辞駆動句構造文法 (Head-driven Phrase Structure Grammar 以下 HPSG と記す) における語彙項目の記述を

用いる。

ウイグル語の形容詞由来動詞の形態を見ると、基本的に、形容詞→自動詞→他動詞のように形成されている。本研究ではこれを語彙規則的な形式化で記述する。

4.1 変化動詞か活動動詞か

動詞は、意味的観点からも分類することができるが、その中に変化動詞と活動動詞がある。

変化動詞は、変化の結果ある状態/位置に達することを表す動詞で[8]、LCSによる分析では、

[BECOME [[1] BE AT-[2]]]・・・自動詞
[[1] CAUSE [BECOME [[2]] BE AT-[3]]]・・・他動詞

のように分析されるものである。一方、活動動詞は、対象物の変化を含意せず、基本的に、主語の意思によって始めと終わりを決めることのできる動詞で、力の続く限り継続・反復することができる動詞である[8]。LCSによる分析では、

[[1] ACT]・・・自動詞
[[1] ACT ON-[2]]]・・・他動詞

のようになる。

これらを見分けるテストとして、時間を表す副詞的修飾語句との共起を用いることができる。すなわち、「～間」のような副詞的修飾語句（期間句）と共起できれば活動動詞、「～分で」のような副詞的修飾語句（期限句）と共起できれば変化動詞である。

このテストを用いてウイグル語の形容詞由来動詞を分類してみると、例外はあるものの、基本的に変化動詞であることがわかる。

Yéngi bazargha sélin'ghan kompyutérning bahasi 1 heptide erzanlidi.「新発売のコンピュータの値段が1週間で安くなった。」

ただし、進行を表す-wat ととも共起し、変化動詞としてはやや特殊なふるまいをする。

Kompyutérning bahasi erzanlawatidu.「コンピュータの値段が安くなっていく。」

また、活動動詞であると考えられるものも見つかっている。égiz「高い」から派生したégizle-を見てみよう。

*Ayropilan 30 minutta égizlidi.

飛行機 30 分で 高いle 過去

Ayropilan égizlewatidu.「飛行機が上昇中です。」
期限句"30 minutta"「30分で」との共起が不可能で、いわゆる進行形-ewatidu になることから、égizle-は変化動詞ではないと言うことができる。

4.2 -le 他動詞

3章で見たように、形容詞に-le がついてできた動詞は、その多くが自動詞であるが一部は他動詞である。それらは、yéngila-, toghrila-, tikle-などである。これらには対応する自動詞があり、それぞれ、yéngilan-, toghrilan-, tiklen-である。ここでは、この自他対応を考えたい。

はじめに、対応する他動詞を先行研究[6][11]にならって次のように記述する。

ARG-ST [EXT <1:3>, INT <2:4>

LCS [[[3] ACT] CAUSE [BECOME [[4] BE AT-[5]]]]

自動詞について、まず、yéngilan-「新しくなる」と toghrilan-「正しくなる」について見ると、これらは次のように用いられる。

Mekteptiki kompyutérler yéngilandi.「学校のコンピュータが新しくなった。」

Oqutquchilarning idiyisi toghrilandi.「教師たちの考えが正された。」

いずれも変化を含むが、その変化は、自然に起こる変化ではなく、誰かが起こすということが示唆される。本研究ではこれを先行研究

[7]にもとづき脱使役化(de-causativization)として分析する。さらに、先行研究[6][11]にならって形式化する。この結果、yêngilan-などの動詞は次のように記述できる。先行研究[DI]ではLCSにおけるx=yのように、同一レベル、すなわちLCS上で議論しているが、本研究では先行研究[6]にならい、項と、それがとる意味論的値を区別する。

ARG-ST [EXT <>, INT <[1]:[3]>]

LCS [[[[2]ACT] CAUSE [BECOME [[3] BE AT-[4]]]]]

次に、tiklen-「垂直、縦になる」について見ると、tiklen- の場合は、動作を起こしたものが不明ではなくはっきりしている。

At tiklendi. 「馬が垂直になった。」

本研究では、先行研究[7]にもとづき、これを反使役化(anti-causativization)として分析する。さらに先行研究[6][11]にならって形式化する。この結果上述の tiklen-は、次のように記述できる。

ARG-ST [EXT <>, INT <[[1]:[2]]>]

LCS [[[[2] ACT] CAUSE [BECOME [[2] BE AT-[3]]]]]

5. 結論

ウイグル語における形容詞由来動詞を記述した。

本研究で明らかになったことは次のとおりである。ウイグル語の形容詞由来動詞は基本的に自動詞である。他動詞化接辞がつくことで他動詞になる。例外的に、形容詞由来の他動詞があり、それらは自動詞化接辞がつくことによって自動詞になる。-leのように、一つの接辞が自動詞を形成したり他動詞を形成し

たりすることがある。意味的には、ウイグル語の形容詞由来動詞は基本的に変化動詞であるが、変化動詞としてはやや特殊なふるまいをする。また活動動詞であると考えられるものも見つかっている。

参考文献

- [1] Arslan Abdulla (ed.). (2010). *Hazirqi Zaman Uyghur Tili*. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.
- [2] Arziyev R. (2006). *Uyghur Tili*. Almuta. Mektep.
- [3] Muallim. *MP900*. Ürümchi. Muallim
- [4] Sag I. A. & Wasow T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*. CSLI.
- [5] Zhao Xiangru, Zhu Zhining (1985). *Weiwueryu Jianzhi*. Beijing. Minzu Chubanshe.
- [6] 今泉志奈子・郡司隆男(2002), 「語彙的複合における複合事象」伊藤たかね(編)『文法理論:レキシコンと統語』東京大学出版会.
- [7] 影山太郎 (1996)『動詞意味論』くろしお出版.
- [8] 影山太郎 (1999)『形態論と意味』くろしお出版.
- [9] 影山太郎 (編) (2009)『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店.
- [10] 竹内和夫 (1991)『現代ウイグル語四週間』大学書林.
- [11] 橋本力(2003)「計算機上で動作する日本語 HPSG 文法の構築」『言語処理学会第9回年次大会発表論文集』言語処理学会.